

NPO法人 龍ヶ崎ゲヴァントハウス
2016年春の特別企画 ~ 講演会とCDコンサート ~
**カラヤンが認めた日本グラモフォンサウンド
その制作現場とレコード**

当法人が毎年音楽界・オーディオ界でご活躍の講師をお招きして開催している特別コンサートですが、2016年度最初の特別企画は、講師として元日本グラモフォン・プロデューサー、乙黒正昭氏をお招きし、「カラヤンが認めたグラモフォンサウンド その制作現場とレコード」と題して講演会とCDコンサートを行います。

カラヤン、ベーム、バンスタイン等の名盤が次々とリリースされた1960~1970年代はクラシック音楽産業の黄金時代でした。その中核を成したのが「イエローレーベル」で親しまれたドイツグラモフォンです。当時のLP、音楽テープ、当時の録音音源を基にしたCDの音は、デジタル時代の今日のCDの音よりも優れているという評論家やユーザーの評価が優勢を占めています。

乙黒氏は当時、日本グラモフォン(現ポリドール)の録音課に席を置き、録音のかたわら、ドイツ本国から送られて来るマスターテープのマスターリングやカットティングを行っていました。制作に関しては「原音再生」を基本ポリシーとし、顧客の注目を集めるような「音作り」を行っていた他のレコード会社の傾向には見向きもしませんでした。「日本にも音の分かる技術者がいる」という巨匠カラヤンからの一報が届いた時の技術者とは、乙黒氏本人でした。カラヤン来日時にはカラヤンに直接会い、グラモフォンのあるべき音について語り合いました。

エンジニアとしてレコード、音楽テープの制作に携わる一方、マーケティング・プロデューサーとして所属アーティストの広報活動にも尽力されました。特にカール・ベームとは個人的にも親交が深く、1975年ウィーン・フィルとの来日の際にはベームと生活を共にしてバックアップしました。コンサート大成功の陰の功労者と感謝された乙黒氏は、ベームの自宅に招待されています。

今回は、当時のグラモフォンの音作りについて、アナログからデジタルに変わった微妙な音の変化についてまで言及、当時制作したレコードを再生し、その制作過程について解説して頂きます。

日 時：2016年3月5日(土) 午後2時~午後4時30分

場 所：龍ヶ崎ショッピングセンター「リブラ龍ヶ崎」2階旧映画館

講 師：乙黒正昭氏(元日本グラモフォン・プロデューサー)

————— プログラム —————

プッチーニ：歌劇「修道女アンジェリカ」間奏曲から(1967年録音)

スッペ：歌劇「詩人と農夫」序曲から(1969年録音)

バッハ：マタイ受難曲から“神よ、憐れみたまえ”(1971、1972年録音)

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

バッハ：マタイ受難曲から“神よ、憐れみたまえ”(1958年録音)

カール・リヒター指揮ミュンヘン・バッハ管弦楽団

レハール：喜歌劇「メリー・ウイドー」から“ヴィリアの歌”(1972年録音)

エリザベス・ハーウッド(ソプラノ)カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

————— (休憩10分) —————

チャイコフスキー：交響曲第5番ホ短調第4楽章から(1975年録音)

チャイコフスキー：交響曲第6番ロ短調第2楽章から(1976年5月録音)

チャイコフスキー：交響曲第4番ヘ短調第1楽章から(1976年12月録音)

ベートーヴェン：交響曲第6番ヘ長調“田園”第2楽章から(1976年録音)

ベートーヴェン：交響曲第6番ヘ長調“田園”第2楽章から(1982年録音)

アルビノーニ：弦楽とオルガンのための“アダージョ”(1983年録音)

ベートーヴェン：交響曲第3番変ホ長調“英雄”第3楽章(1976年録音)

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団